中学部研究

研究テーマ
知的障害等を合わせ有する肢体不自由の生徒の教科指導について考察する
～「やりがいのある活動」と「手ごたえを感じる活動」を目指して～

1　研究グループの概要

（１）在籍生徒数　Ⅰコース　在籍生徒（知的単一：２０名、知的代替：２名）
Ⅱコース　在籍生徒（重複：3名）　計２５名

（２）研究対象授業　作業学習（農園班、手工芸班、リサイクル班）

（３）研究グループ　各作業班の担当教員＋学部主事＋教務主任

2　目的

▶特別支援学校学習指導要領の基本的な考え方と方向性について理解を深める。
▶教科等を合わせた指導の基本的な考え方について理解するとともに、「学びの連続性」や「教科横断的な視点」を踏まえた作業学習の授業づくりを目指す。
▶知的障害等を合わせ有する肢体不自由の生徒の学習指導における配慮事項について、教員間で意見交換しながら考察し、指導に生かす。

3　研究の実際

＜作業学習に関する共通理解＞

①教科等を合わせた指導に関する共通理解
▶引用：学習指導要領解説　各教科編
・研究対象授業を作業学習とし、文献研究とワーショップ型研究を中心に研究を進めた。

作業学習は、作業活動を学習活動の中心にしながら、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものである。

②中学部段階における作業学習について
（１）「学びの連続性」について共通理解を図った。
Ａ：学部間の学びの連続性

小学部（生活「役割」「手伝い・仕事」）→ 中学部（職業・家庭）→ 高等部（職業、家庭）

Ｂ：中学部３年間の学びの連続性

第1学年 → 第２学年 → 第３学年

（２）中学部の作業学習において育成したい力について意見交換をし、３つの観点にしぼり、授業づくりを進めることとした。

【正確性】
・手順のとおりに一つ一つの作業を正しく行う力
【主体性・持続性】
・自ら進んで作業に取り組み、最後までやり遂げる力
【協調性】
・仲間同士で支え合いながら、同じ目標に向かって協力して取り組もうとする態度

＜授業づくりの視点の共有＞

③授業づくりの視点に関する共通理解
（１）ワーク「生徒の実態把握」を通して、生徒一人一人の作業力、コミュニケーション力に応じた指導の必要性が高いことが分かった。

（２）生徒一人一人の実態に応じた指導の工夫を図るため、作業学習の授業づくりの視点について共通理解を図った。
＜主な授業づくりの視点＞

時間の構造化	焦点化
場の構造化	スモールステップ化
ルールの明確化	展開の構造化

（３）共通確認した授業づくりの視点を踏まえた授業づくりを目指し、各作業班の事例研究を行った。
・フィッシュボーン法によって、授業の評価を行い、成果と課題を挙げ、課題の改善を図った。

＜時間の構造化＞

④活動の流れ
始めの会
・目標の確認
・分担の確認

作業
＜農作業＞
＜手工芸＞
＜紙漉き＞

終わりの会
・振り返り（日誌）
・成果発表

◎肢体不自由の生徒の指導において、自立活動の視点（主に環境の把握、身体の動き、コミュニケーション）を踏まえ、支援方法や教材・教具の工夫を図ることが大切である。
・活動の焦点化とスモールステップ化の視点をもち、授業づくりをすることで、生徒一人一人がやりがいや手ごたえを感じながら活動することにつながった。

＜目標、活動の焦点化＞

⑤生徒一人一人の実態に応じた活動の焦点化
（１）各作業班の作業内容について、教員間で意見交換し、工程を分け、生徒が自分自身の役割意識をもち、作業に取り組めるようにした。
（２）各工程、２、３名のグループで取り組み、生徒同士がやり取りを交えながら活動できるようにするとともに、同じ目標に向かって協力しながら取り組もうとすることを意識付けるようにした。
（３）繰り返し同じの工程に取り組む中で進歩が見られ、ステップアップできると評価できる生徒は、別の工程にも取り組んだ。

＜挨拶・報告等、ルールの明確化＞

⑥将来、社会に出て生活する上で必要となるコミュニケーション力の基礎を築くための指導
（１）言葉によるコミュニケーションに困難さのある生徒は、発声やiPadアプリ「DropTap」を使い、挨拶や報告をする経験を積み重ねた。
（２）中度・軽度の知的障害の生徒に対しては、場面ごとの挨拶や報告をまとめた壁面掲示や工程表を準備し、自身の作業を終えたり、支援が必要な際に教師や仲間とスムースにやり取りができるよう、工夫した。

4　成果と課題

＜成果＞重複障害の生徒の学習指導における配慮に関する考察を手始めに、教師の共通理解の基、作業学習の授業実践研究を通じて、生徒の実態に応じた手立てや教材づくりへつなげることができた。

＜課題＞中学部３年間で生徒に身に付けさせたい力を明確にし、生徒の実態に関する教員の共通理解を基に、各教科の「見方・考え方」を踏まえ、教科横断的に資質・能力を育むことを目指す授業実践を行うことが重要である。